♡童貞処女

♡イケメン×イケメン

♡クール×元気

♡おもらし

♡潮吹き

♡純愛

「君が好きだ」

そう言われて僕は段差につまずいて膝から転ぶ。まてまて、なにがなんて？

「誰が、何を？」
「俺が、高橋くんを」

告白してきた本人、イケメン藤川修平は僕を起こしながらもう一度言葉を放った。僕と彼の関係は大学の同期だ。僕だって別に不細工というわけではないしどちらかといえば顔は整っている方だと思う。いや今はそんなことどうでもいい。

「それは…友情…の意味で？」
「いや、君を抱きたいと思っている」
「だっ…！？」

動揺している僕とは逆に淡々と言葉を発している藤川は、丁寧に膝の砂まで払ってくれる。抱きたいってなんだよ、こいつ僕をからかっているのか…？そうか、そうやって僕を油断させておちょくるつもりなんだな…？その手には乗らないぞ藤川…！

「そ、そうなのか？まさかイケメンの藤川がゲイだったなんてね！」

「？俺はゲイじゃない、高橋くんが好きなんだ」

「ゲイはみんなそういうんだよ！」

なんでこいつ肩を掴んで見つめてくるんだ離れろ！そんなに好き好き言われると照れるだろ！！

「…で？僕とどうなりたいんだ？」

「俺と付き合って欲しい」

強気で言ったつもりが、面と向かって言われると顔がどんどん赤くなってしまう。ていうかここ普通に街中なんだがなにを考えているんだ、周りから変な目で見られてるぞ！

「わ、わかった、いや、わかってないけど、ちょっと場所を変えよう」

赤い顔を隠すようにさっさと歩いて人の少ない小さな公園へ歩いていく。夕方の遅い時間になり、子供も大人もほとんど姿が見えない。部活帰りであろう高校生らしき子達がちらほら。僕たちはその小さな公園のベンチに腰掛ける。状況をまず整理させてくれ。

僕と藤川は先述したとおりただの大学の同期だ。特にお互いを意識する

ようなハプニングが起きたわけでもない。1年から同じ講義に出てて、友達の友達って感じで紹介されてなんとなく一緒にいるようになった。波長が合うのか、こいつといるとなんとなく心地よくて一緒にいてしまう。僕としてはいい友人としか思ってなかったし正直驚いたが、真剣な顔の友人に対して無理ですと断るのもなんか悪い気がして。

「･･･その、本気、なのか？」

「ああ」

「･･･冗談ではなく？」

「ああ」

体は緊張で固くなるし変な汗は出るし…これはどうしたものか。恥ずかしながら、今まで部活や勉強に必死になりすぎて、恋愛だのなんだのはほとんどしたことがない。男はもちろんのこと、女性ともだ。告白してくる人も中にはいたが、今までやんわりと断ってきた。彼女が欲しいと思ったこともあったが、それ以上に部活に打ち込んでいたし、そのおかげで全国大会にも出場した経験もある。この大学にもスポーツ推薦で入学したほどだ。大学に入ってからもスポーツ一直線だし、実は雑誌の取材とかを受ける程度の有名な選手でもある。自分でいうのもあれだけどそこそこスポーツがうまい方だしそこにかける情熱は高かった。

だからこそ恋愛の仕方なんて今更わからないし、そもそも男と付き合うって？僕も藤川のことは好きだ。ただ、これが藤川が言うような「好き」と、僕の「好き」は違うかもしれない。友人としては本当にいいやつだと思っている。包容力もあるし、兄弟の一番上ということもあって面倒見もいい。僕がスポーツでスランプに陥りそうだった時も、家族から離れて一人暮らししてる僕のそばにいてくれたのは藤川だ。
何度も言うが藤川のことは好きだ。でも付き合えと言われて断るのも違う気がするし、かといってOKでもない。でも、やっぱり藤川のことは好きだ。

「…お試しで、っていうのは…？」

僕が散々考えた結果、出たのはそれだった。一週間とか、あるいは一ヶ月、付き合ってみて本当に僕は藤川が好きなのか自分も知りたい。思っていたことを全部藤川に告げると、付き合ってくれるのかと少し嬉しそうな顔をしたので「と、とりあえず１週間！」といったら抱きしめられた。

「なら、こういうこともしていいんだな？」
「し、仕方ないな、許可しよう」

照れ隠しなのかなんなのか自分でもわからない言葉がでた。そのあとよく行くファミレスでご飯を食べ、お互いの家に帰った。あまりご飯が喉を通らなくて、味も覚えていない。ものすごく緊張していたと思うが、藤川はいつもどおりだった。そういえば聞いたことないけど、藤川って彼女いたことあるのかな。こういうのにもしかしたら慣れているのかもしれない。家にはどうやって帰ったか正直覚えてなかった。告白されたことが思ったより頭に残ってしまって、ぽやぽやしながら帰ってしまった。よく事故に会わなかったな。お風呂に入っても考え事をしたせいで軽くのぼせてしまい、慌てて湯舟から出て頭や体を拭いてほぼ全裸のまま布団に倒れこむように横になった。

翌朝、目が覚めると自分が服を着てないことに驚いた。そういえば風呂から出てそのまま寝てしまったんだった。時間を確認すると昼の 12 時過ぎ、今日は練習もなく大学もないから完全な休みの日でよかった。寝すぎた。そしてスマホを見るとラインの通知が数件。1 件は藤川からだった。

昨日のことが一気にフラッシュバックし、顔に熱が集まる。ラインを開いてみると、ちゃんと帰れたか、という心配のメールが送信されていた。受信は朝の 9 時。随分返事を待たせてしまっている…すぐに返事を送ろ

う。

「おはよう、ちゃんと帰った。心配ありがとう、と…」

なんか事務的な報告みたいだな、と思いつつ返事を送ったと同時に、家のインターホンが鳴った。あまり人が訪れることがないのだが、来るとしたら高校からの友達の夏井かな？と思いつつドアを開けると目の前に藤川がいた。

「ふ、藤川…？」
「返事がなかったから、心配になって来てしまった」
「あ、今、送った」
「そうか、よかった」
「…！！！」

安心したような顔を見せた藤川はふわりと僕を抱きしめた。びっくりした僕は両手を彷徨わせているが、これは背中に手を回してもいいやつだよな…？おずおずと背中に手を回すと藤川が抱きしめる力を強めてきて、、藤川の体温がより近く感じた。

「そ、そういえば、今日は休み？」
「いや、講義抜け出してきた」

「は！？なにやってんだ！」

「高橋くんのことが心配で集中できなくて。君の顔をみて安心した」

どうやら講義すっぽかしてきたらしい。僕のことが心配で…？今までそんな過保護になったことはなかったのに…いや、そもそもここまで距離近くなかったし、今は恋人、だからか…お試しだけど。

「ほ、ほら、僕の無事を見て安心しただろ？早く講義に戻ってこいよ！」

「そうだな、いってくる」

「！」

おでこに、ちゅーされた…！いや、これくらい恋人なんだから…！僕も負けじと藤川の頬にキスをしてやる。

「い、いってらっしゃい」

「…」

「お、おい！早く行けって！」

「悪い、高橋くんがあまりにも可愛いもので」

「っ！」

僕が勝ち誇った顔をしたら、藤川がキョトンとしている。早く行けと言ったら少し照れたように藤川が口を開いて頭を撫でてくるので、めちゃ

くちゃ恥ずかしくなった。絶対顔赤くなってる、と思わず俯くと、藤川の左手に顎を掬われ、上を向かされた。

「行ってくる」

「っん…！」

そう言って藤川は去っていった。キスされた。唇に。これも恋人同士ならやることだし、なんら不思議でもない。ただ、唇を離した時の藤川の優しい顔にドキっとしてしまって、しばらく動けなかった。
よろよろと部屋に戻った僕は、シャワーを浴びるべく、着替えを持って浴室へ向かった。なんだかんだその日１日は過ぎたのだが、あのあと何をしていたのかよく覚えていない。すごくぼーっとしていたというのは確かだ。

翌日は部活の練習を難なくこなし、いつもと変わらない体育館。もう日も沈んだので、大学に残っている人間も少ない。今日は藤川からの連絡はきていない。いや、そんなことを気にしてるなんて女々しすぎか！いや、でも恋人なんだし、僕から送ってみてもいいのか…でも送る内容なんてないし…それに万が一勉強中とかだったら迷惑だと思ったのでラインを送るのをやめた。明日で藤川と付き合って４日目か、なんてぼんや

り思いながら、ちゃんと返事をしなきゃと頭をもんもんとさせた。
恋人になって藤川と一緒にいて、嫌悪感を感じたことは一度もない。むしろキスされて嬉しかったくらいだ。気持ちはほぼ決まっている。ただ、言い出すのに緊張をしているだけだ。一週間なんて待たなくてもいいのだから。勇気を出せ高橋祐樹！！男だろ！
自分を奮い立たせ、藤川に今会える？とラインした。してしまった。するとすぐに既読がついて返事が来た。全然勉強なんかしてなんかったかもしれない。返ってきたラインの内容は、今行くとだけ書かれた一文。どこにいるか言ってないのに来れるのだろうか。帰りの支度をして体育館を出ると、驚いたことに藤川が体育館前にいた。僕と藤川が仲いいのは部活仲間も知ってる仲だから、特段気にする人もおらず、じゃーなって声だけかけてみんな帰っていく。

「ずいぶん到着が早い到着だったな」
「近くにいたからな」
「ふーん」

会話をしつつ僕の家への帰り道を歩く。どうやって何から話そうかなと思ってるうちにどんどん僕の家が近くなっていく。

「何か用があったんじゃないのか？」

「ああ、えっと…」

藤川から話かけられても緊張でうまく言葉がでてこない。藤川は何も言わず僕を見つめてくる。やめてくれ余計に緊張する…！でも目をそらされればそれはそれでいやだ！しかしこういうことはきちんと目を見て伝えるべきだと思った僕は、藤川の顔を、彼の目を見る。絶対今顔赤い。

「つ、付き合っても、いいよ、お試しじゃなくて、ちゃんと…恋人として」

よし言ったぞ！言ってやったぞ！偉いぞ高橋祐樹！心臓ばくばくながらも心の中で勝ち誇っていると、藤川が顔を近づけてきたので、うわキスされると思いぎゅっと目をつぶると、予想していたものはこない。だが彼の気配は目の前にある。ゆっくりと目を開けると、ものすごく至近距離に藤川の顔があってびっくりした。咄嗟に距離を取ろうと後ずさると藤川に腕をつかまれて引き寄せられた。近い近い…！すると藤川は愛おしそうに僕の頬を撫でた。

「君が好きだ」
「･･･僕もっんぅ」

返事をしたと思ったら僕の唇は藤川の唇によって塞がれた。何度も角度

を変えてキスしてると、藤川の舌が僕の唇を舐めた。ちょんちょんと唇をつついてくるので、これは開けろという意味なのかな、おずおずと唇を開くと、藤川の舌がぬるりと入ってきた。先にも言ったように、こういう経験の少ない僕は、どうしたらいいかわからずされるがままになっていた。藤川の舌が口の中で動き回るので、背筋がぞくぞくして仕方なかった。だんだん呼吸も苦しくなり、藤川の胸板を軽く押すと、あっさり離れていった。

「は…はぁ…」
「随分可愛い顔をしていたぞ」
「なっ！？目開けてたのかよ！？」
「ふふ、これからもたくさんの顔を見せてくれ」
「悪趣味…っ」
「かわいい」

そういってもう一度噛み付くようなキスをされて、僕の服の中に藤川の手が潜り込んだところで僕は焦った。いや、恋人同士がすることなんてそりゃわかってるけど、外だしいきなりすぎる！

「んっ、ちょ、っと藤川…っ！」
「どうした？」

ちゅっとリップ音を立てて唇が離される。

「いや、ここで、そういう行為は…っ」

「…あぁ、そうだな、悪い」

「その…僕の家近いし、来る…？」

「行く」

思ったよりも藤川に余裕がなさそうで安心した。僕だけがこんなに余裕なくされてるのかと思った。でもこのタイミングで自分の家に呼ぶって、なんかそういうことをするために呼んでるみたいでめっちゃ緊張する。藤川は僕の家に来たことあるし、僕も藤川の家に行ったこともある。友達同士としてであればなんにも気にしなかったけど、この流れ、絶対…え、えっち…するよな…？

「いくぞ」

「うあ、あい」

腕を引っ張られ、歩いて５分もない自分の家に向かって歩いていく。一人暮らしなんだが心配した両親がいい部屋を用意してくれて、そこそこいいマンションに住まわせてもらっている。そんな家でいよいよそういうことをするんだ、と心臓がばくばくしてきた。藤川に体を触られるわ

けだろう？まずはシャワーを浴びさせて貰って、体を綺麗にしてからじゃないとまずいやだ。そのあと藤川にもシャワーを浴びるように言って、僕はベッドで待っていれば…。と、頭の中でシミュレーションしてると家について、オートロックのドアを開けてさらに部屋に向かっていく。部屋の鍵を開けてドアを開け中に入り、ドアが閉まるのと同時にそのドアに押し付けられて激しいキスをされた。

「んぅ、ぁ、ふじ、かわ、んっ、まって、」
「待てない」
「ちが、んんッ…ふ、ろ…っ！」
「このままの君を抱きたい」
「っ！」

唇が離されたと思ったら、そんなことを言われた。藤川の顔は欲情していて、今までに見たことない顔をしていたので、もともとうるさかった心臓がさらにうるさくなった

「ずっと、こうしたかった」
「藤川…」

ぎゅ、と抱きしめられ、耳元で囁かれた。彼のこんなに余裕のない顔は

初めて見る。体が離れて、藤川と至近距離で見つめ合う。藤川の左手が僕の頬をやさしく撫でてくれる。この大きな手が好きだ。藤川の手に自分の手を重ね、その大きな手に頬ずりする。大学に入る前藤川もスポーツをしていたらしく、男らしいけれどもきれいな手。足のケガでスポーツはあきらめたらしい。藤川は顔を近づけ、再度僕にキスをしてきた。何度も角度を変え、舌を入れられ、上顎を舐められ、僕は膝が震えて立てなくなってしまうが、藤川の右手がしっかりと僕の腰を支えてくれてる。しかし、そのせいで藤川の硬くなったアレが僕のお腹にずっと当たってる。外でした時よりもキスは長く、苦しくなった僕は弱い力で藤川の胸を押す。藤川も唇をすぐに離し、僕のことを軽々と持ち上げた。俗に言う、お姫様抱っこだ。力が抜けた僕は抵抗することを諦めた。実際、腰が抜けて歩けないし。

「…いいか？」
「だめって言ったってやるんだろ？」
「君が本当に嫌ならやめる」

この男は、僕をベッドに下ろしたと思ったら、覆いかぶさりながらそんなことを聞いてくる。ズボン越しでもギンギンにしてたのに、嫌だといえばやめるだと？それが辛いことは、男の僕であればわかる。このまま

の放置では自分が辛いだけなのに、それでも僕のことを気にかけるのか。それ以上に僕もこの先をもう期待してしまっている。緊張するしこの先するの初めてだし藤川にまかせっきりになってしまうがいいのか。

「今はもうちゃんとした恋人だし、いいよ」

「高橋くん…」

「その代わり、…や、やさしくして」

僕は恥ずかしくて消え入りそうな声で藤川に言った。でも藤川にはしっかり聞こえていたらしく、ああ、と短く返事をしたあと、キスをしてきた。

キスをしながらシャツの中に手を入れられ、、直接肌に触れる。一応これでもアスリートとしてちゃんと鍛えているので、決して柔らかくない肌を藤川が撫でる。くすぐったいような、そんな気持ちで体を少し捩ると、藤川の手が胸の突起に触れた。あ、と小さな声が出たが、正直、気持ちいいというよりも、くすぐったい。

「藤川、くすぐったい、」

「はじめはそうかもな。徐々によくなると思うぞ」

「んん…」